感情コミュニケーションにおける非言語チャネルの利用

韓国人大学生を対象とした感情表示の分析

○曹美庚¹・釘原直樹²

(¹阪南大学国際コミュニケーション学部・²大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード: 感情コミュニケーション, 非言語チャネル, チャネル優先性, 文化的普遍性

Nonverbal Channel Use in Communication of Emotion

Mikyung CHO¹ and Naoki KUGIHARA²

(¹Hannan Univ., ²Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ.)

Key Words: communication of emotion, nonverbal channel, priority of channel, cultural universality

目 的

対人コミュニケーションにおける感情表示は、言語・非言語チャネルの如何を問わず、コミュニケーション活動の潤滑油的な役割を果たす。これまで感情コミュニケーションにおける非言語チャネルの研究は、主として顔の表情や声に焦点が当てられてきた。とりわけ、怒り・恐怖・喜び・悲しみ・嫌悪の感情に対する顔の表情の識別に関する研究からは、これらが異なる民族や文化においても普遍的に解読可能であることが確認された (Ekman & Friesen, 1971; Ekman, 1993)。しかしながら、日常生活においては、顔の表情や声以外にもジェスチャーやタッチなど他の複数の非言語チャネルを併用しながら感情をコミュニケーションしている。

Appらは、米国の大学生 39 名を対象とした実験から、異なる感情の伝達において、特定の非言語チャネルがより頻繁に、かつ重点的に使われ、最も効果的にコミュニケーションが行われていると報告している (App et al., 2011)。

本研究では、アジア文化圏に属する韓国においても、異なる感情が特定チャネルによって最も効果的に伝わること、ならびに感情コミュニケーションにおける非言語チャネルの使用に文化の違いを越えた普遍性があることを検証する。

方 法

実験参加者: 2013 年 8 月、韓国大邱市の 4 つの大学の学部生 51 名 (男子 33 名, 女子 18 名, 平均年齢 = 20.1, $SD = 1.91$)。

実験手続き: 感情コミュニケーションの中でも、異なる感情に対するコミュニケーション送信者の感情表示 (感情生成) に焦点が当てられ、11 感情 (愛・怒り・悲しみ・嫌悪・恐怖・幸せ・罪悪・当惑・同情・恥・プライド) × 3 非言語チャネル (身体・顔・タッチ) の実験が行われた。実験参加者は、実物大マネキンに自分が最も親しく気楽に感じる相手とみなし、ランダムに提示される各感情をその相手に効果的にコミュニケーションするよう求められた。その後、当該感情をどの程度うまく伝えられたかの確信度を自己評価させた。実験は、①チャネル非制限下での感情生成、②チャネル制限下での感情生成、③選好チャネルの選択といった 3 つのパートに分かれて行われ、①と②の実験の様子は DVD で録画された。

結 果

感情表示において、参加者が使用する非言語チャネルに全く制限がなく自由に各感情を伝達できる場合、感情ごとに実際のチャネルが使用されたかを検証するためにカイ二乗検定を行った。その結果、「愛」を除く 10 の感情においてチャネル使用に有意差が認められた (幸せ, $p < .04$; 同情・怒り, $p < .01$; その他, $p < .001$)。当惑・罪・誇り・恥などの感情は身体と顔の二つのチャネルで感情表示する割合が高く、怒り・嫌悪・恐怖・幸せ (喜び)・悲しみなどの感情は顔チャネルの使用割合が高く、愛と同情の親密感情は顔とタッチの二チャネルが多用されていることが明らかとなった (Fig. 1)。

※本研究は、科学研究費補助金基盤研究 C (課題番号 23520727 と課題番号 26503016, 曹美庚代表) の助成を受けた。

次に、各感情において選好されるチャネルが存在するか否かを検証するために、11 感情 (1) × チャネル (3) のカイ二乗検定を行った。その結果、すべての感情において有意差が出ており (恥・嫌悪・幸せ, $p < .02$; それ以外の 8 つの感情, $p < .001$)、チャネル選好がランダムではないことが示された (Fig. 2)。罪悪・プライド・恥の感情は身体チャネルを好み、怒り・嫌悪・恐怖・幸せ・悲しみは顔チャネルを好み、愛と同情はタッチ・チャネルを好むことが示唆された。

Figure 1 感情と感情タイプ別チャネル使用 (非制限)

Figure 2 感情と感情タイプ別選好チャネルの割合

次に、感情をコミュニケーションする非言語チャネルが 1 つに制限された場合の影響を分析した。制限された特定のチャネルが各感情の選好チャネルである場合、感情表示に対する自己確信度の低下 (不確実性) がより少ないことが明らかとなった。この不確実性スコアを用いた感情 (11) × チャネル (3) の分散分析からも、異なる感情は特定の非言語チャネルによってよりうまく伝わることを検証された ($p < .001$)。プライド・恥の感情は身体チャネルに制限されたとき最も確信度低下が低く、嫌悪・幸せ・悲しみは顔チャネルに制限されたとき最も確信度低下が低く、愛と同情はタッチ・チャネルに制限されたとき最も確信度低下が低いという結果により、各感情における各チャネルの有効性が検証された。

また、平均不確実性の変数を用いたクラスター分析の結果に基づき、感情の社会的機能別グループ化を図った。結果は、App らが行った米国の結果と類似している。

考 察

本研究から、アジア文化圏に属する韓国においても、異なる感情に対して特定のチャネルがより重点的かつ優先的に使用され、当該感情を最も効果的にコミュニケーションしていることが確認できた。このような結果は、米国で実施された App ら (2011) の研究結果と類似しており、感情コミュニケーションにおける非言語チャネルの利用において、文化を越えた普遍性が存在することを検証したことになる。